

ポール・ヴァレリー最晩年の肖像：
ドイツ占領下時代から国葬に至るまで

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-10-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 安永, 愛 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00007946

ポール・ヴァレリー最晩年の肖像 — ドイツ占領下時代から国葬に至るまで —

安 永 愛

はじめに

2008年7月、フランスのファイヤール社より浩瀚なるポール・ヴァレリー(1871-1945)の評伝が公刊された。B5版の各頁に50行近くが並び、頁数は1366頁に達している。著者は『文学を前にしたヴァレリー』(*Valéry devant la littérature*, Presses universitaires de France, 1991)等の著作で知られ、ソルボンヌ大学で教鞭を執っているミシェル・ジャルティ(Michel Jarrety, 1953-)。これまでヴァレリーの評伝はダニエル・オステールの*Monsieur Valéry*(Edition de Seuil, 1981)や、ドニ・バルトレの*Paul Valéry*(Plon, 1995)などが知られているが、ジャルティによる評伝は、その規模において別格であり、規模の差は、評伝の解析の次元を変えることにつながっている。

そもそも、ソルボンヌ大学の文学部と言えば、ロラン＝バルトを先鋒とするヌヴェル・クリティックの論者たちが批判の対象とした外在批評、評伝的文学研究の牙城であった。1963年に上梓されたバルトの『ラシーヌ論』をきっかけとしてソルボンヌ大学教授ピカールとバルトの間に起こった批評をめぐる論争は、バルトの標榜する新＝批評のいわばスプリングボードとなり、作品の生まれた背景より作品内のメカニズムや隠された構造の解析が文学研究の主流となる時代が数十年にわたって続いた。人生上の「私」と作品の書き手の素朴な同一視を禁じ、作品を「作者」という同一の自我から引き離し、徹頭徹尾言語の振舞いの帰結であると見なして「作者の死」を宣告した新＝批評の方法は、言語学や精神分析学などの人文社会諸科学のベースとも結びつき、作品の分析の精度を高めたが、一方で歴史や社会とのダイナミズムの中に作品が位置づいている点を閑却しがちであったことも否めない。バルト＝ピカール論争から数十年経ち、隘路に陥った文学研究はむしろ集合的記憶や歴史の文脈へと開かれるようになり、外在批評と内在批評をバランスさせる方向へと向かうようになって

てきたと総括できるが、途方も無いと映る規模の評伝を物したジャルティは、勿論そうした文学研究の流れを重々承知しているだろう。

ヴァレリー自身の著作、書簡、草稿は勿論のこと、交流のあった人物の文献に可能な限りあたり、ヴァレリーの人生を、週ごと、日ごとと言ってよい細やかさで（本評伝においては、○月○日○曜日という記述が頻出する）再現し、夥しい固有名詞の鏤められたジャルティによるこの『ヴァレリー伝』は徹底した評伝であるとともに、さながらフランスフランス第三共和制の文化史的アルシーヴの観を呈している。

本評伝については現在、共訳プロジェクトが進行中であり、筆者は編年体のこの評伝の最後にあたるドイツ占領下の1942年からパリ解放の約一年後の1945年のヴァレリー死去までを描いた箇所（第53章から第57章）を担当している。評伝は文学理解にあたっては副次的なものでしかないとの観念からは逃れ難いが、圧倒的な緻密さで描出されるヴァレリーの生からは、人生もまた歴史や運命の偶然により織り成された一つの作品であり、その「作品」の意味を考えることも、文学固有の価値を考えることとそれほど隔たったものではないのではないかと考えさせられる。

本稿においては、ミシェル・ジャルティによる1942年から死にいたるまでのヴァレリーの人生の描写を踏まえ、人生という「作品」の姿が凝縮した形で現れる彼の最晩年（1942年から1945年にかけて）について、ヴァレリーが追い求めていた価値がいかなるものであったかを常に念頭に置きつつ、またジャルティが執筆の際に大切にしていた、人柄を映し出す素朴な細部や逸話に目を配りつつ論じていくこととしたい。

1. ドイツ占領下フランスの知識人として

1917年、長い沈黙の後、46歳にして詩集『若きパルク』を発表し、その成功により瞬く間に文壇の寵児となり、以後、第三共和制下の欽定詩人のごとき役割をあてがわれることになったヴァレリーは、多少のアイロニーを交えつつも従容としてそれを引き受ける。1917年を境としてヴァレリーは一介の無名サラリーマンから代表的知識人に転身したわけだが¹、ヴァレリーが一種の公人と

¹ 『若きパルク』の作品の価値をすぐさま認め、無名だった著者に最大級の敬意と期待を寄せたフランス第三共和制の文壇およびそれを取り巻く一種の社交界の性格を考察することは興味深い課題であるが、他稿を期したい。

して振舞うことを期待されていたことを前提に考えなければ、彼の後半生の意味を十分に考えることはできない。本稿が対象とするドイツ占領下時代から死去にいたる時期において、ヴァレリーは自らの言動が一個人を超えた意味合いを付与されることを常に意識していた。

まず本節では、ドイツ占領下におけるヴァレリーの選択（政治的であることを免れない）を分析していこう。ドイツ占領下に入ることによって、フランスの占領地区の暮らしは不如意に陥るが、出版活動や紙の配給がナチス・ドイツの監督下に置かれることになり、フランスの作家たちは困難な選択を迫られる。レジスタンスか対独協力か、あるいは沈黙か。しばしば掲げられる三つの選択肢だが、実際にはこうしたカテゴリーにはまりきらないものもあり、例えばレジスタンスを掲げながら、資金援助を受けるために対独協力をする、といった現象も見られた。ヴァレリーはドイツ占領下時代に「沈黙した」と評されることが多いが、そのように割り切れるものでないことをジャルティは明らかにしている。

この困難な時代の中でのヴァレリーの政治的なスタンスを最も如実に示したのが、『新フランス評論』*La Nouvelle revue française* (NRF) をめぐる一件である。『新フランス評論』は1908年にパリの若い文学者たちによって発刊された文芸雑誌である。当初は同人雑誌であったものも、ガリマール社の刊行となり、フランスの文学活動の前線を形成していった。このフランスを代表する革新性をも帯びた良心的文学雑誌も、ついにナチス・ドイツの統制下に置かれることになる。文学雑誌の刊行を存続させることは、いわばフランスにおける全うな文学活動が存続していることの証に等しいと考えられたのだが、雑誌刊行を存続させるために必要な財政的基盤を支えるためにはドイツの認可が必要であるという困難があったのである。

ヴァレリーは1942年、この雑誌の編集委員就任を打診される。しかし、ヴァレリーは委員就任を受諾するが、対独協力者であるドリュ・ラ・ロシェル²の編集長留任には激しく反対を貫いた。ヴァレリーはジッドに以下の通り書き送っている。

NRFについてはクロードルの意見に賛成だ。一緒にうまくやろう。我ら

² Drieu La Rochelle (1893-1945) フランスの作家。ファシズムを資本主意と共産主義に抗するものとして評価し、ドイツ占領下時代には対独協力者となる。

揃って。さもなければ白紙撤回だ。「我ら」というのは、君と僕、クローデル、モーリアック、それからファルグのような人。何がしそれから最後に、有能な人たち。他のメンバーを入れたら台無しになると口を酸っぱくして説明しておきました³。

つまりヴァレリーは表立って文章の形で「抵抗」はしなかったのだが、自らが名を連ねる雑誌の編集委員から対独協力者を排除することによって、レジスタンスを行っていたのである。ジャン・ポーランはジャン・ゲーノに宛てた書簡の中で「ヴァレリーはそれについては完璧だ。ドリユ、ジュアンド、モンテルランの拒否にも、何かをする決定にも妥協がない。期待以上だ⁴。」と述べている。

ドイツ占領下時代にヴァレリーは「沈黙した」とされるが、そもそもヴァレリーはナチス・ドイツ当局（ナチス宣伝部隊）から用紙配給を拒絶されている。ナチスの傀儡政権のヴィシー内閣のペタン首相が1942年4月の勅令により用紙配給の割当の対象外とする作品を選出する役目を担う「出版検閲局」を設置し、ナチス宣伝部隊の「プロパガンダ・スタッフェル」が割当外作品のリストを承認したり変更したりすることになり、ヴァレリーの『邪念』も用紙割当外作品とされたのである⁵。ヴァレリーには『カイエ』という公表を前提としない私的な「作品」の場があったとは言え、著作を公けに問えないという状況がいかに理不尽に感じられたか、想像するに余りある。書き物による「抵抗」ではなく、自らの雑誌の同人から政治的方向性を違える者を一徹に排斥する、という形での「抵抗」をヴァレリーは選んだのである。

書物での発表がままならない中で、ヴァレリーは各地に招かれ弁舌を振るう。七十歳を前にしたヴァレリーは暗い時勢の中、知性の光を求めて足を運んだであろう聴衆を前に、文学的回想を語る。この一連の講演会についてヴァレリーは友人マルグリット・フルニエに宛てた手紙の中で「この一連の「リサイタル」は、どこでも好評でした。打ち明けて言えば、世の惨状、フランスの断絶はむしろ私の名声には有利に働いたのです⁶。」と打ち明けている。

³ 1942年4月28日付け書簡。 *Correspondances Gide-Valéry*, Gallimard, 1955, p.527.

⁴ ポーランからゲーノに宛てた1942年4月6日付けの書簡。 *Choix de lettres, t. 2*, Gallimard, 1992, p.273.

⁵ Michel Jarrety, *Paul Valéry*, Fayard, 2008, p.1131.

⁶ マルグリット・フルニエに宛てた1942年5月16日付けの書簡。 *Lettres à une amie*, Ed, Marcelle Chirac, Fondation de Lourmarin, 1988, p.46.

ヴァレリーは優れた書き手であっただけではなく、講演の名手であり、座談において人を魅了する存在であったことが伝えられているが、おそらくはこうした講演の成功体験も与り、ヴァレリーはいささか無防備にヴィシー・ラジオへの出演を引き受けたのだと思われる。ナチス宣伝部隊の監督下にあったこのラジオ局の番組にヴァレリーはたびたび出演するが、必ずしも本格的な文学的談話を電波に乗せるわけにもいかず、そのうちヴァレリーは面倒に感じ始めラジオ出演をやめた。しかし、その後もヴィシー・ラジオは無断でヴァレリーの詩の朗読を三回にわたって放映したという⁷。出版は差し止めるが、同じ著者の作品といえども詩の朗読は許可する、というヴィシー傀儡政権の選択は奇妙に映るが⁸、こうしたことのためにドイツ占領下時代におけるヴァレリーのささやかな「抵抗」が見落とされ「沈黙」した作家という像が定着することになったのかも知れない。

資料博搜の上にかかれたジャルティによるヴァレリー評伝からは、ヴァレリーが占領下において「沈黙した」作家ではなく、「抵抗」した作家であったことが浮かび上がってくる。ヴァレリーは1942年、愛書家協会の会長であるルディネスコよりベルギリウス『牧歌』の翻訳依頼を受けるが、黄色の星を身につけることを拒み、断固としてアンチ・ペタン政権の姿勢を持する（妻のジェニー・ヴァイス、そしてレジスタンスに加わった妹のルイズと同様）このユダヤ人医師との出会いと会話は、ヴァレリーをヴィシー政権から一層遠ざける役割を果たしたと、ジャルティはルディネスコの書簡⁹を引きつつ指摘している。実際ヴァレリーは、当時の出版人からレジスタンス陣営であると見なされていたのであり、戦争末期にミニユイ出版社勤務の若き詩人のルイ・パロは、ヴァレリーの態度が確固としたものであることに触れ、次のように述べている。

ポール・ヴァレリーは、独仏のマニフェストに参加し、独仏の雑誌に寄稿するよう幾度となく頼まれたが、この著名作家は1940年6月以降、いかなる素振りも期待せしめぬ如き態度を取った。（中略）ヴァレリーはレジスタンスの葛藤の成り行きとその仕事を熱心に追っていた¹⁰。

⁷ 1943年2月12日にはイヴォンヌ・デュコとロジェ・ゲラルドにより、同年4月2日にはマリー・マルケにより、ついで1944年2月25日に詩は朗読された。

⁸ ナチス宣伝局がなぜそのような選択をしたのかについて考えることは、文学の政治性について考えることでもあり重要な課題であるが、この点については稿を改めたい。

⁹ エリザベート・ルディネスコの個人的証言。1941年5月の未公開書簡。

¹⁰ Louis Parrot, *L'Intelligence en guerre*, 1945, Bibliothèque Jacques Doucet, VRY MS 83.

ヴァレリーは自我というものを、存在論的後退、事実を前に一步退く能力、拒絶する力であるとみなしていた。遠目にはヴァレリーの抵抗は見えにくいものであるが、彼はドイツ占領下時代を拒絶の相の下に生きたといえるのではないだろうか。

2. ドイツ占領下も続く社交の日々

ドイツ占領下の重苦しく不如意な時代の中であって、ヴァレリーは旺盛に社交を重ねている。ジャルティの評伝には、会食、パーティー、晩餐会、劇場や音楽会に赴くヴァレリーの姿が多々書き込まれている。その頻繁さは、書き手として思索家として必要な集中力や孤独の時間を損なうものではないかとの疑問を呼ぶほどである。ヴァレリーの交友範囲は広きに及ぶ。ヴァレリーはフランス第三共和制の一種の文化使節として国内外を盛んに講演し、各地に知己を得ており、アカデミー・フランセーズ会員として、またヨーロッパ知的協力委員会の一員として、地中海大学センター長として仕事に取り組む中で繋がった縁も多い。おのずと文学の枠組みを超えた様々な分野にヴァレリーの知己は見出される。

ヴァレリーはあまたの友情を紡いでいくが、一種の公人となった彼の後半生において独特に感じられるのは、自宅を宿として提供したり、バカンスを過ごしてもらうべく別荘に招くといったメセナ的な存在が見られることである。ヴァレリーを詩人・知識人として尊敬しつつ、物心両面で援助しようとする存在が見られるのである。毎夏「ポリネジー」の別荘をヴァレリーに提供したポリニャック公爵夫人は、その代表例であるといえよう。ドイツ占領下の厳しい時代にあっても、ヴァレリーは華やかさに包まれている。

以下に、ジャルティによる一晩のパーティーの描写を挙げてみよう。パーティーに虚しさを憶えるヴァレリーの胸中が明かされる件であるが、幻滅も含めてドイツ占領下でのパーティーの華やぎが感じ取られるであろう。ヴァレリーは最晩年の愛人であるジャン・ヴォワリエことジャンヌ・ロヴィトン¹¹の自邸での年越しパーティーに招かれている。

¹¹ 1903-1996。出版社経営者、弁護士。ヴァレリーのコレージュ・ド・フランスでの講義を聴講したことがきっかけとなり、1937年以降、ヴァレリーと親密な関係にあった。ヴァレリーの晩年の未刊作品『わがファウスト』に登場する秘書ルストのモデルである。ヴァレリーはヴォワリエに『ナルシス交声曲』や二冊の詩集『コロナ』『コロニラ』を捧げている。二人の間で、千通を越える手紙のやりとりがなされている。

大晦日の年越しはアソンプション街¹²で過ごし、ジャーニーが付き添った。しかし、楽しくはない夕べだった。豪華なビュッフェの夜会に、ジャン・ヴォワリエは多くの客を招いており、中にはレオン＝ポール・ファルグ、フランシス・プーランク、そして若きクロード・モーリヤックがおり、やがて居間の隅にいたクロードのそばにヴァレリーが座る。クロードはピアフのレコードとシャンパンで上機嫌になっており、ピアフの歌は最も高貴な芸術に達しているのだということを、隣に座った有名人に納得してもらおうと、友人とともに画策する。「『終わりはどうなるかわからない』と『私の心が選んだのは彼』は極上の詩情に導いてくれます。」とクロードはヴァレリーに言う。しかし、疲れたその偉人はいぶかしげにうなずいただけだった。クロード・モーリヤックは「悲しい気持ちで私はヴァレリーをじっと見る。眩い顔の中で、狼狽したような小さな目が瞬いている。」と記している。それから他の招待客たちが加わり、クロードが記すには、一瞬「ヴァレリーが取り乱した哀れな目で私を眺めてきたので、にわかには自分の言ったことが恥ずかしくなった。」ヴァレリーはついに「やはり『ベレニス』のほうがいい。」とクロードに言い、最高齢の招待客たちの多くと共に十時頃帰っていった。しかし、年配の招待客が帰る頃、若く美しい客たちがやってきた。老人にあのうろたえた眼差しを与えたのは、まさにこの若さなのだった。ヴァレリーを傷つけたのは、それも最も深く傷つけたのは、アソンプション街に流通している諸価値がもはや自分には無縁なものになっていることがわかってしまったことであり、帰宅するとヴァレリーは『カイエ』にパーティーが彼に残したものについて「つまらない喧騒という印象」と書き付ける。「皆、魂が欠けていて、集まりのごたまぜからくる「楽しさ」は卑しい素材をしか燃やさない。ほとんど価値がない¹³。

分野を違える者、世代を違える者が集い出会いを楽しむ。馴染みの人物と連なる初対面の人物との思いがけない会話。上記の引用においてヴァレリーはパーティーでの失望を語っているが、それはもともとパーティーの場への期待あってこそのものであると思われる。ヴァレリーは基本的に会話を楽しむ人間だったのであり、上記の引用に現われているのは、それを楽しめなくなったヴァレリーの老いの痛烈な自覚である。ヴァレリーは年老い、体力が衰えていく中で

¹² ジャン・ヴォワリエ自邸の住所。

¹³ *Op., cit.*, Michel Jarrety, *Paul Valéry*, pp.1139-1140.

も、社交の場へ出ていくことを控えようとはしない。生活の一部となって長年続いてきた社交を、一度のパーティーで幻滅した程度で断ち切ることはない。

ヴァレリーの疲労を気遣い、あまり外出してほしくないと思った妻のジャンニは、1943年2月21日、ヴァレリーがコレア邸でのレセプションのためジャン・ジャステルのもとに行こうとするのに立腹する。しかし、ヴァレリーは2日後の23日火曜日には、夕食のためモンドールに再び会っている。そのようなヴァレリーを評してジャルティは「会話の楽しみを剥奪されることを承知しない¹⁴」と書き付けている。

社交での会話とはどのようなものだろうか。一つの例として、モーリヤック宅での昼食会の描写を掲げよう。

ヴァレリーはまさにモーリヤック宅で26日に昼食を取った。招待されたのは、ただ、思いがけなく子牛の丸焼きが届いたから、という理由からである。というのもこの食糧難の時代には、そうしたことが友情をも司っていたからである。この日、モーリヤックがエマウスの弟子たちの福音書を読み（そのことをヴァレリーは*Rhums*に書くのだが）パンとワインが地中海を定義づけていることに非常に驚いた様子を見せた。友人たちの前でヴァレリーはそこからささやかな理論を引き出す。その理論によれば、中国もアメリカも聖なる秘蹟の素材を与えることはできないだろうし、ビール¹⁵の国であるドイツも教会から切り離されたというわけである。さらに驚いたことにヴァレリーは、キリスト教の最も道理にかなった教理は身体の復活であるという。その後、モーリヤックがマラガールの葡萄畑から得たものであるワインの瓶を抱えて帰途に着いた¹⁵。

友人たちとの食卓を囲みながら会話を交わす愉悦が伝わってくる。食卓での会話は思いがけない発想が湧く機会ともなる。妻の制止を振り切って、体調が十分でなくとも会食の場に赴こうとするヴァレリーは、そうした会食の妙味を知っていたのではないだろうか。

ナチスの支配下において出版に不如意が生じた分、それを埋め合わせるかのように占領下のパリでヴァレリーは演劇や音楽との接触を密にしている。演劇

¹⁴ *Ibid.*, p.1141.

¹⁵ *Ibid.*, p.1146.

の演目に親しむのみならず、俳優や劇作家たちとの縁も深めていく。1942年11月11日にフランスに『フェードル』を観に行ったかと思うと同年12月6日には、ミコディレ劇場にてエドゥアール・ブルデの新作『父』の初日に足を運び、拍手喝采した。また、自らの作品である『ナルシス交声曲』の舞台化を申し出た若き演出家には稽古の場に行くと約束し実行する。

また、ガリマール社の作家たちの集う一種の口実としてガリマール社社長のガストン・ガリマールの意向でプライベートな形で開催され始めた「プレイヤーのコンサート」は、回を重ねて一般公開され、サル・ガポーやシャンゼリゼ劇場といった堂々たるホールにて開催されるようになり、ヴァレリーは足繁く通う。オーソドックスな演目に混じり、新進の作曲家であったオリヴィエ・メシアンも初演も行われた。ヴァレリーは、このコンサートで青年だったピエール・ブーレーズとも顔を合わせている。

ヴァレリーは占領軍が組織する文化的催しを避けていたが、ドイツ文化やドイツ人そのものを避けていたわけではなく、作品に興味があれば門戸を閉ざすことはなかった。この時期ヴァレリーは1932年に自ら書いた『ゲーテを讀んで』の翻訳を願っていた。

ヴァレリーは戦前から知り合いだった人々に対しては、レジスタンスの闘士であろうが対独協力者であろうが交流を保ち続ける。例えば、アカデミー・フランセーズの同僚であるグラント枢機卿は、ヴィシー政権に好意的な態度を示していたが、ヴァレリーは変わりなく友人でありつづけた。グラント枢機卿は、時折アカデミー・フランセーズで、「帽子に隠して持ってきたマン産の高価なバターの塊¹⁶」をヴァレリーに渡したりしたという。職務上でヴィシーやドイツ人と時に少々過剰なほど相当に緊密な関係のある人物たちとも会い続けた。ジャルティはそのような人物の例として、コメディエール・フランセーズを運営し、コルネイユの記念祭にブラジャックをコメディエール・フランセーズに招いてモリヤックにショックを与えたジャン＝ルイ・ヴォドワイエ、オペラ座のバレエ団を率いたリファール、ドイツ占領軍およびペタン政権との親密な関係を保つことで個人的便宜を図ってもらっていたサシャ・ギトリを挙げている¹⁷。

ヴァレリーの文業は遠く南米にも伝わり、アルゼンチンのヴィクトリア・オカンボはヴァレリーに敬愛の念を寄せ、ドイツ占領下での物資の不足を案じ、

¹⁶ *Ibid.*, p.1152.

¹⁷ *Ibid.*, p.1153.

ヴァレリーに、煙草や靴や食料を送った。

このように、占領下時代のヴァレリーは、多分に社交生活に支えられていたのである。

3. ポストへの思い―「地中海大学センター長」「コレージュ・ド・フランス教授」

占領下も続いた華やかといってよいヴァレリーの社交生活は、彼の公的立場の威光も伴ってこそのことであった。『若きパルク』で成功を収めた詩人は、1925年にアカデミー・フランセーズ会員となり、1932年にはニースの地中海大学センター所長に、1937年にはコレージュ・ド・フランスの詩学講座の教授に就任している。その他にも、国際連盟の下部組織である国際知的協力委員会の議長も務めている。ヴィシー政権下にあつて、ヴァレリーは地中海大学センター長の職を解かれ、またコレージュ・ド・フランス教授の定年も間近に控えていた。公職の中でもこの二つの役職は、ヴァレリーにとってかけがえのない拠り所となるものであったと見られる。ヴァレリーはニースの地中海大学センター長への再任のチャンスをもどかしい思いで伺っていたのは事実であるし、コレージュ・ド・フランス教授の定年が戦時加算のために引き伸ばされたと知ったヴァレリーは喜びを隠していない。

ヴァレリーが望みのポストを得るために、人事を握る人物の書物に序文を寄せたのではないかといった憶測も流れているが、その真偽はともかくとして、地中海大学センター長およびコレージュ・ド・フランス教授のポストが占領期において、政治的な力学に操られていたことは否めない。事実ヴァレリーはペタン元帥より、ポストに絡め、政治的スタンスを試す質問を投げかけられているのである。その際の応答には、ヴァレリーの身の処し方が如実に表れている。二人のやり取りに関するジャルティの記述を以下に引用しよう。

ペタンの最初の質問は、政府に対する思いに関するものであった。ヴァレリーは、特に思うところはないと答えるにとどめた。第二の質問は「ニースの地中海大学センターにおいてはナチスのために雇っている要員と緊密な協力関係を築く必要があるだろう。ナチスの知り合いがいるか？」ということであった。「知り合いはおりません。」とヴァレリーは返答した。「ありのままの彼等を、どうして私が選ぶというのでしょうか？」¹⁸

¹⁸ *Ibid.*, pp.1128-1129.

恵まれた気候と、地理的条件により豊かな文明が発達し、ヨーロッパの基礎を形作った地中海とその沿岸地方を格別なものとして位置づけていたヴァレリーにとって、地中海文化の解明を任務とする地中海大学センターの長を務めることは、国家の枠組みを超えた文明史的な大きな意義を持つものと映っていた。しかし、ナチズムの力学に巻き込まれつつ任務を全うするというのは、不条理であり、冒瀆的なことであると思われたに違いない。ペタンを前にヴァレリーは譲歩することはなかった。

コレージュ・ド・フランスの詩学教授ポストについて言うならば、ヴァレリー自身が「詩学」Poïétiqueという講座名を創始したのであり、そのタイトルのもとで、文学を制作学の一環として、さらには文明・社会の機能の一環として捉える意欲的な試みが続行されてきた。コレージュ・ド・フランス教授は当代の第一線の学者が担い、最上の成果が講義に反映されるものとされ、聴衆の熱気は並々ならぬものがあつた。大階段教室で行われる講義は、フランスの教養人士のスペクタクルと言ってよかつた。その熱気を受けながらヴァレリーは自らの制作学をめぐる理論を鑄直していったのである。定年を前にヴァレリーは音楽家のナディア・ブーランジェに「何週間か後には、私はもうコレージュ・ド・フランス教授ではなくなるでしょう。年ですから。お先は真っ暗です¹⁹。」と認め、コレージュ・ド・フランスでの最終講義では、少しとぼけた調子で次のように述懐させている。雑誌『ガゼット・ド・ローザヌヌ』に掲載された記事から引用しよう。

年を取りましたので、五年前に着座したコレージュ・ド・フランス教授の椅子から降りなくてはなりません。着任当時は、こんなポストに私が、と驚きもしましたし、若い畏友ジョゼフ・ベディエとアレクサンドル・モレ（二人とも一九一八年に死去している）の計らいに導かれ、老いばれ詩人が新米教授になって話をしたり、そんな自分の声を聴くのに怖気づいたりしたものです²⁰。

¹⁹ ナディア・ブーランジェ宛て1942年4月27日付けの未公開書簡。フランス国立図書館、音楽部門、マイクロフィルム VM BOB 21218。

²⁰ この最終講義「私の「詩学」」あるいはおらくはそのレジユメが、1942年8月26日に『ガゼット・ド・ローザヌヌ』に掲載されることになる。(Cf., Paul Valéry, *Oeuvres II*, Gallimard, 1960, p.1607)

ドイツ占領下という閉塞感と忍び寄る自らの老いに苦しめられながらもヴァレリーは、地中海センター所長とコレージュ・ド・フランス教授という二つのポストに、残された自らの生を生かす可能性を見据え続けるのである。

4. 内燃する生命、老いと闘い

ドイツ占領下時代の1941年にヴァレリーは古希を迎える。思考力に衰えは見られなかったが、体の衰えは留めようがなかった。1942年頃からヴァレリーは、不安のめまいによりベッドの足元で、そして次には廊下で倒れ、廊下で足を引かず、また倒れ、入り口のマットに根が生えたように居座ってしまう、というようなことが起きるようになる²¹。ヴァレリーは自らの老いについて、30歳近く年下の愛人ヴォワリエに宛てた書簡の中で、以下のように書いている。

私の朝は以前とは異なり、明敏と豊穡により時に殆ど痛ましくさえあったあの水晶のような朝ではありません。日ごとの日没は、すなわち己れの転落です。何か硬質で不動のものという耐え難い印象がしばしば頭に浮かびます。それに私はかつてないほどに仕事しなくてはならないのです²²。

また、自らの私的かつ精神的な手記である『カイエ』にはこう記している。

私は脂の塗られた頂に感じるように感じ、眠りと夢の中でそのたびごとに滑りこけている。それは、密かな落下である。息切れのする仕事だ。三歩歩いて疲れて立ち止まり、ベンチに倒れこむ人のように。それが私の精神だ²³。

私は崩壊し、荒廃してしまった。もはや虚無の重みしかない折れた丈高い茎のイメージである²⁴。

これが、華やかな社交の場に頻繁に足を運んでいたヴァレリーの偽らざる老いの姿であった。老いによる喪失を埋め合わせるかの如くに、ヴァレリーのヴォワリエに対する思いは烈しさを増していく。死の影がどこかで意識されるから

²¹ *Op. cit.*, Michel Jarrety, *Paul Valéry*, p.1135.

²² 1942年11月3日付けのジャン・ヴォワリエ宛て未公開書簡。セート美術館所蔵。

²³ Paul Valéry, *Cahiers*, CNRS, CXXVI, 1957-1961, p.705.

²⁴ *Ibid.*, p.714.

であろう、ヴァレリーは自らの人生が到達するべき絶対的な愛という観念を紡ぎ続ける。遺族による長年の禁を解かれて公開されることになったヴォワリエ宛てのヴァレリーの書簡には、狂おしい言葉が書き連ねられている。遠ざかり始めたヴォワリエに対し、二人の蜜月を思い起こさんとしてヴァレリーは必死である。

43年9月6日、7日、8日のことがわたしの手帳に書いてあります。それは自分の人生の中で平穏な時でした。それは、生成する存在の美と簡素さと優しさと陽気さとが交じり合うポエジーを生きるということでした。ここにあるものは、まれにしかそれ自身であることがなく、それ自身、それ自身以外の何ものでもないものであることが難しい。彼はあなたのことを覚えているのですか？空のあの夜を、透き通ったエメラルドを？自由と確信と二人の信仰の中でのかの歩み。カリプソの洞窟²⁵は？そして眠りの前のいとも貴重な議論は…？²⁶

老いたる大詩人の恋文に密かに冷笑を浴びせかけ、ヴォワリエは冷静なる計算に沿い、出版社社長のドノエルを自らのパートナーとすべく、事を運んでいく。ヴォワリエはヴァレリーの来訪を拒まないまま、ドノエルとの逢瀬を重ねる。時には、アソンプション街のジャンヌの自宅を訪れたヴァレリーが帰るのを、ドノエルが隣の部屋にて無言で待っている、などといった茶番が出来するようになる。

ヴォワリエは、1945年の復活祭の日曜日に、ドノエルとの結婚をヴァレリーに告げる。しかし、それでヴァレリーと縁を切るというのではない。むしろドノエルとの結婚を選び出版の仕事を肩代わりしてもらうことで、以前にも増して黙許の時間をヴァレリーと分かち合い、特別な友情という未来をつむぐのだとヴォワリエは明るい表情で語ったのである。ヴォワリエは果たして誠実なのか？ヴァレリーは、突如として彼女からかわられているとの感情に襲われる。老いた身にヴォワリエの婚約宣言はあまりに過酷だった。記憶が飛ぶほどのショックを受けたヴァレリーは、数日後ヴォワリエに宛て以下の通り手紙を認める。

²⁵ 思い出のつまったベデュエの階段の待避所へのエロチックな暗示。ヴァレリーはヴォワリエを「カリプソ」のあだ名で呼ぶことがあった（ジャルティの注記による）。*Op. cit. Jarrety, Paul Valéry*, p.1150.

²⁶ ジャン・ヴォワリエ宛ての日付けのない手紙（1943年-1944年初頭）、セート美術館所蔵。

私は君のうちに偉大なる女性を見ていた。完璧な女性を。—ルネサンス期に存在したような創造主としての女性、高尚なる恋人、豊かで自由で、あらゆる行動の価値と快樂とを可能にする者。／少なくともこの非常に麗しい理想を愛しなさい。このような理想を抱いた者がもはや存在せず、ある祝福された時代に、呪われた存在の前で、君にとってそうであったような存在ではもうありえなくなったとするならば。／でも私は今や、君自身から発し、私をおそろしく眩感した固有の光のことを思わざるを得ない。君は欲望の全き凡庸さ、計画の俗悪、やり口の不実に囚われてしまっている²⁷。

ヴォワリエという女性に見た夢、ほとんど女神の域にまで高められた美しい幻影、そしてそれを打ち砕かれたヴァレリーの悲哀が刻まれた書簡である。やるせない心のうちを、ヴァレリーはヴォワリエにぶつけないではいられない。ドノエルとの結婚への手筈を肅々と進めていたヴォワリエは、一体どのような思いでヴァレリーからの手紙を読んでいたのだろうか。

生き生きとした過去が無ければ、私は未来を想像してみようという気にはならないでしょう。／未来のイメージがなければ、過去はそこそこ耐えうるものとなるでしょう。でも私は、檻に入れられ鉄格子に囲われた獣の如くうろうろとしますが、出口はないのです²⁸。

過去のイメージと未来のイメージに領されて、現在という時を失っているかのごときヴァレリー。ヴォワリエの結婚決意の報告を「斧の一撃」として受けとめたヴァレリーは、自らの存在基盤が揺らぐように感じる。ヴォワリエの翻意を前に、フランス第三共和制を代表する文人としての榮譽は、傲慢の罪に転化し、ヴァレリーの落胆を激しいものにするものでしかなくなってしまう。ヴァレリーは次のようにヴォワリエ宛ての書簡に記している。

何を贖えというのだろうか？おそらく何年も詩人としての権力と感受性、感性で高揚し、不条理の頂点へと全力で駆け上ったという罪であり、優しさのモニュメントが突然塊となって、私の人生に落下してきたのです。／ああ、

²⁷ 「ジャン・ヴォワリエ関連文書」、オースティン大学所蔵、f 18。

²⁸ 「ジャン・ヴォワリエ関連文書」、オースティン大学所蔵、f 46。

お願いだから助けておくれ。私は喪失感を覚えている…²⁹

つれない年下の女性に対しヴァレリーは、自らの立場や社会的地位など意味を持たないかのように、無防備に弱さをさらけ出している。ヴォワリエとの交歓は、ヴァレリー自身の抱いていた愛のアイデアと結びつき、彼の文学的テーマと結びつきさえしていただけに、ヴォワリエの冷たさを前に、なりふり構っていられなかったのではないだろうか。やがてヴァレリーは文学史の中にヴォワリエへの愛の範型を見出し、ヴォワリエに次の如く書き送る。

打ち明けて言えば聖テレーズと十字架の聖ヨハネの結合（神秘主義の意味でのレベルにおいて）は深いところで結び付いているものの一つであり、私には相変わらず人生のシステムの本当の頂点—ゲーテ流などの栄光よりもはるか高い—のひとつだと思われます³⁰。

社会的な栄達を果たして後の、この痛ましい愛情の喪失感は、結局未完のものとして遺されることになる『我がファウスト』執筆に影を落とす。ファウストが愛を貫き、意識の透明な絶望へと至り、愛されないというもう一つの絶望にリュストを落としいれ省みぬことになる場面とするか、同一なるものと他なるものが調和し、現実的なものや人間的なものの彼方の一種の崇高な超越に至るシーンとするか。ヴァレリーは己の傷心を抱えつつ、戯曲の方向を探っていく。

七十歳を超えたヴァレリーは、このようにエロスの葛藤に翻弄されるが、ヴォワリエへの思いはヴァレリーの生命を痛ましさを伴って高揚させ、残されたヴァレリーの生命力を内側から食い破るものでもあった。ヴァレリーにここまでの痛手を与えたヴォワリエについて、ジャルティはこの上なく手厳しい調子で、その悪女ぶりを暴いてみせている。

ところでヴァレリーが遡ってこの運命的な日曜日（ドノエルとの結婚の決意を告げた日）のことを思う際、それ以後驚かされたのは、ジャンヌを導いた冷静かつ計算された戦略の見事な手綱さばきである。彼女は作家のキャリ

²⁹ 日付のない未公開書簡。セート美術館所蔵。

³⁰ 「ジャン・ヴォワリエ関連文書」オースティン大学所蔵, f 52。

アから編集者のキャリアへと移り、別種の支援を必要とするようになるや、もはや何者でもなくなってしまう老人を慇懃無礼な茶番を介して自らの舞台から追い出したのだ。何ヶ月にもわたって、そんな変身がなされているのをヴァレリーは見ていた。彼女は次第に硬化していき、欲得尽くの眼差しを人間に注ぎ、各人を己のゲームの成功のためのカードをとしてしか見なくなっていく。今や明らかとなったのは、かなり前から企てられてきたゲームにおいて、ヴォワリエは装われた優しさの名残のもとに冷ややかさを秘めており、それがあつた日、感情のからむ余地のない外科的な仕草により乱暴にヴァレリーをお払い箱にすることに繋がっていったということである³¹。

ヴォワリエの悪女ぶりがいかにばかりであったのか、本当のことはわからない。ともあれ、ヴォワリエの冷淡さに傷つづいたヴァレリーの老いは加速していく。1945年復活祭のヴォワリエの結婚報告はヴァレリーの老いによる衰弱に追い討ちをかけ、死へと向かわせる引き金となったのではないか。そのような推察をよぶかのように事は推移していく。ヴァレリーは1945年5月にコレージュ・ド・フランスで聴衆に別れの挨拶をした後、まもなく自宅のベッドを離れることができなくなった。至高の愛を求め内燃する生命も、やがては老いと死に飲み込まれていくことになるのである。

5. パリ解放の歓喜の中で

前節において、占領下時代からパリ解放後にかけてのヴォワリエをめぐるヴァレリーの失意の劇について述べたが、1944年7月のパリ解放の集団的歓喜を、ヴァレリーもまた共有していた。ヴォワリエとの関係で傷心の状態にあつても、ヴァレリーはフランス第三共和制の代表的文人としての顔を維持し、フランスの象徴的統合を願うド・ゴール自身が開催を希望した戦勝パレードをトロカデロ宮殿のテラスから見物する。ヴァレリーはパレードを見ようとして集つてきた群衆たちを見下ろし、以下のように記している。

樹木の力強い緑の幾多の塊の間に間に、群衆の存在が色とりどりに粒立ち、一丸となった生命が印象派の絵画のように見られる³²。

³¹ *Op. cit.*, Michel Jarrety, *Paul Valéry*, p.1190.

³² Paul Valéry « Un rien d'événement », *Vues*, Gallimard, 1948, p.395.

隷属状態を脱し、平和を取り戻した安堵と歡喜が、この光景描写には込められている。集团的歡喜に言葉を与えるのもフランス第三共和制の代表的文人たるヴァレリーに期待された仕事であり、ヴァレリーは9月2日付けのフィガロ誌に寄稿した記事に以下のように記している。

これで息がつけるのだ。我々は自由であると思うと、今この瞬間の未来が膨らむ。その思いは我々の胸一杯に広がって、何とは知れぬが内面の翼の奪い去るような陶酔的な力が我々を鼓舞するのである。

« Respirer » (息をつく) との動詞一つの簡潔な記事³³のタイトルには、まさに「息を詰めて」暮らしていた占領下時代の終焉に安堵し、歡喜するフランスの国民の思いが重なっている。パリ解放後にコレージュ・ド・フランス教授に再任され講義を行ったヴァレリーは、言論が自由となった喜びを以下のような挿話に重ね聴衆に伝えている。

私は数ヶ月前に軍の将校に話したことを繰り返すことができます。その将校は、コレージュ・ド・フランスの鉄格子の前で私を呼び止め、これは美術館か、と尋ねてきました。私は彼に答えました。「これは学校です。」「それでは、この学校では何を教えているのですか？」「それをご説明するとあまりに長くなってしまおうでしょう。ただこれだけ言いましょ。これは言葉が自由な館なのです。」それを聞いて将校は私に敬礼し、私も彼に敬礼しました³⁴。

既にコレージュ・ド・フランスでの講義の準備が重荷に感じられていたヴァレリーだったが、1944年12月にはソルボンヌ大学で開催されたヴォルテール生誕二百五十年記念式典でヴォルテールについて話した。ヴァレリーはヴォルテールにアンガージュマンの文学の先駆者の相貌を見出している。パリ解放直後の時期にあって、「精神の自由」を称揚することが何より大切だったのであり、ヴォルテールはそうしたメッセージを伝えるにあたってこの上ないシンボルであっ

³³ *Ibid.*, pp.397-399.

³⁴ コレージュ・ド・フランスのヴァレリー関連文書。ジャルティの引用による。
(Cf. *Op. cit.*, Michel Jarrety, *Paul Valéry*, p.1181)

た。そして、二度の世界大戦を経験した者として、ヴァレリーは呼びかけるように講演で次のように述べている。

ヴォルテールのような人はどこにいるでしょうか。今日、声が上がるでしょうか？卑劣な罪に応じた巨大な地球規模の大罪を弾劾し、呪い、制圧するには、劫火と化した世界に見合うだけの、どれほどの巨大ヴォルテールが必要とされるのでありましょうか³⁵。

ヴァレリーの最後の数ヶ月は、ヴォルテールの著作に親しむ日々だった。ヴァレリーはヴォルテールの大胆不敵な情熱に愛着を覚えていたのである。15年にわたり国際連盟の知的協力委員会の一員として「精神の政治」の実現を願いながら果たせなかった苦さも重ね合わせ、「とりわけフランス的で、他の風土のしたでは決して考えられない³⁶」と彼自身評していたヴォルテールの著作を枕頭の書としたのである。

パリ解放後、政治の表舞台に現れたド・ゴールに、ヴァレリーは共感を覚えるようになり、知人のエレヌ・ヴァカレスコに「ド・ゴールの『神秘』に私は魅せられています³⁷。」と述べている。パリ解放後間もない9月4日にド・ゴールは、ヴァレリーを晩餐会に招いた。その素早さこそヴァレリーへのオマージュであったとジャルティは指摘している³⁸。ヴァレリーは晩餐会でのド・ゴールについて『カイエ』に記している。少々長くなるが、文人と政治家の交流の記録として、以下に引用しよう。

ド・ゴールが音もなく入ってきた。目を引くほど背が高い。星のごとき両の目。がっしりとした鼻っ柱。長頭に栗色の髪（ヴァシェ・ド・ラプージュの回想）。かなり強く重々しい眼差し。期待以上にド・ゴールは好感が持てる。と映った。ド・ゴールは、お目にかかれて嬉しいと言った。我々より格段に事情に通じているという風には思われなかった。それに、政治的な質問については非常に慎重だった。先週の件については大した関心を持ってもないようだった。ノートル＝ダムでのテロについては、馬鹿げた出来事と見なして

³⁵ *Op. cit.*, Michel Jarrety, *Paul Valéry*, p.1180.

³⁶ *Ibid.*, p.1180.

³⁷ *Hélène Vacaresco une grande européenne*, p.168.

³⁸ *Op. cit.*, Michel Jarrety, *Paul Valéry*, p.1165.

いた。(実はテロとは言い過ぎで、ド・ゴールがパレードのあと「テ・デウム」のミサに列席した直後に一斉射撃がなされた。) 目下の逮捕については、注意を向けるつもりはないようだった。／戦争に関しては何度も印象を述べていた。米軍侵攻が容易であったのは、米軍とドイツ軍(おそらく東に移動しようとはしないスターリンも)とのあいだに合意が成立していたためであり、できるだけ早く平和をもたらすために、ヒトラー・ヒムラーの連中が軍を粛清しようとしていた。(実際には、侵攻は言語道断なほど素早かった。) 私はベタンについて語る。／晩餐会(美味しかった)の後、ド・ゴールは私を隣のソファに座らせ、二人で語り合った。私は彼に出版報道等の件について語った。／それから輪になった。全体での会話である。私は武器や発明、ウェグラン(ダラディエ、ジュオー、ガムラン、レイノおよびラ・ロック大佐とともに拘留された)について語った。マッシグリは私にレジェはワシントン(開戦時からそこに行き、反ド・ゴール主義を隠しはしなかった)で全く無能だったと言った。ド・ゴールが残るのかロンドンに発つのかマッシグリが知らないことに驚いた(マッシグリはその後ロンドンに発ち、十年にわたり大使を務める)。／23時30分にド・ゴールは暇を乞い、私もそれに乗じて帰った。かなり謎めいたド・ゴールについて、私はまだはっきりとした見解がもてない。軍人であれ、政治家であれ、人間について化学的分析を行うのは難しい。しかし、ド・ゴールは最も複雑な勝負をする人間の集中力を持っているように思われた。現在の勝負において、実にたくさんのカードがある³⁹。

ヴァレリーは偉人というものは政党や政局的なものを凌駕しうるものだとの見解を持っていたが、ド・ゴールはそのイメージに合致していたと言えるだろう。ヴァレリーは10月23日に『若きパルク』をド・ゴールに送り、30日の月曜日には「我が親愛なる師よ、ご高著、そして全てに、感謝します⁴⁰。」と帝王の簡潔さで書かれたドゴールの返信が届いた。10月27日にド・ゴールはレジスタンス詩の朗読会にヴァレリーを招待し、特別ボックス席に同席させ⁴¹、ド・ゴールとヴァレリーの親交を多くの人々が知るところとなっていった。

パリ解放後のヴァレリーには、解決すべき政治的課題があった。一つはアカ

³⁹ *Op. cit.*, Paul Valéry, *Cahiers*, CNRS, C.XXIX, pp.11-12.

⁴⁰ 1944年10月30日付けド・ゴール將軍の未公開書簡。フランス国立図書館所蔵。

⁴¹ *Op. cit.*, Michel Jarrety, *Paul Valéry*, p.1172.

デミー・フランセーズ会員の肅清と刷新の問題である。アカデミー会員選出は、ヴィシー政権下にあった4年の間中断されており、定員40名のところ28名の会員しか残っていなかった。そのうち対独協力した者を除名する動議も出され、除名、選出すべき人数だけでもかなり上った。デュアメルやモーリヤック、ラカーズ海軍大将と共にヴァレリーも中心メンバーとなり、立候補の表明や関係者への訪問を抜きにして心当たりの者に打診し、選出するという解決策が取られた。ヴァレリーはクロードに打診したのだが、選出方法を不服に感じたクロードの反対に遭い、失敗に終わっている。

また長きに涉って非合法的に活動し、今や公的機関となったフランス作家会議についても同様の問題が生じていた。パリ解放後間もない9月9日に同会議は、60名ばかりの署名を添え「フランス作家の意見表明」と題した意見書を『フランス文芸』創刊号に発表しているが、この文書は、パリ解放の前後にデュアメルの働きかけもありフランス作家会議の会員となっていたヴァレリーの最終チェックと署名を経たものである。作家たちの政治的スタンスを旗幟鮮明にした文書を引用しておこう。

フランス作家会議は、フランス作家の唯一の代表的で活動的な組織だった。あらゆる世代から、あらゆる流派や党派から作家が集い、互いを分かちかねないことは全て忘れ、祖国と文明の存亡を脅かす危機を前に結束を固める決断をした。／占領下の暗黒の中で、我々が自らの認識を解き放ち、それなしでは全ての真実は嘲弄の対象となり、全ての創造は不可能になってしまう精神の自由というものを表明することができたのは、この組織のおかげである。／パリは解放された！ F F I が前線で戦っている連合軍は、フランス全体の躍進に支えられ、前進し勝利していくのである。／我々が苦しみと抑圧のもとにあった頃と同様に、勝利と自由の中で結束を固めよう。／我々の声を上げなくてはならないし、我々の任務はこれから生まれる世界の中で確固としたものになっていかなければならない。様々の考えを大いに突き合わせていく中から、試練の頃と同様に決然とした、そして皆の一致した声が常に響くよう、ここに宣誓しよう⁴²。

⁴² *Op.cit.*, Michel Jarrety, *Paul Valéry*, p.1168.

ドイツ占領下の異常事態を脱し、本来の文学活動を取り戻すべく、こうして国内の作家たちの足場は固められつつあったが、国内の問題の解決を超えた役割がヴァレリーには更に期待されていた。ペンクラブの問題である。ペンクラブにおいても肅清の問題があったが、皆が再度入会手続きを取る、という単純化された方法が採択される。ヴァレリーはペンクラブについてはクレミュに委ね、距離を置く形でしか関わってなかったが、解放後の再興にあたっては配慮の労を惜しまなかった。死去した際、そのこと忘れなかったマンブレは、次のように書簡に記している。

パリ解放後のかなり微妙な状況の中で、我々のセンターを再建する際、ヴァレリーが私を支えてくれたことは、ありがたい思い出として残っています。すでにヴァレリーは疲労感を覚えている、およそ新たな役職を受け入れられるような状態ではなかったのです。それでもヴァレリーは我々の依頼を拒みませんでした。ただ、名前を貸すだけしかできなかつたのでしょうか、それだけで十分だったのです。ヴァレリーは我々にその存在感を示し、友情を寄せてくれたのです⁴³。

このようにヴァレリーは老身を押して、アカデミ・フランセーズ、フランス作家会議、ペンクラブという三つの団体のいわば戦後処理の問題に骨を折った。しかし、ヴァレリーが政治的行動を取ったのはそれに留まらない。ジュリアン・カーンやペローの恩赦を求め、ド・ゴールに宛て嘆願書を提出してもいた。

1944年12月、ブラジル人のフランス大使表敬の晩餐会にてヴァレリーは「私はレジスタンスの活動をさほどしたわけではありません。アカデミー・フランセーズにおいては若干レジスタンス活動をしました⁴⁴。」とさりと言っているが、占領下時代から解放後までのヴァレリーの言動を見るに、党派的行動から距離を置いているかに見えて、要所要所で大胆に決断を下すと共に行動し、政治的影響力を行使していることが見て取られる。

⁴³ 1945年7月25日付、ハーモン・オウルド宛てアンリ・マンブレの未公開書簡、ハリー・ランソム・センター、オースティン大学、フランス・ペンクラブ文書。

⁴⁴ 引用は未公開の一種の日誌に載っているもの。ジャヤルティの引用による。Op. cit., Jarrety, Paul Valéry, p.1178.

6. 最期のヴァレリー

パリ解放の歓喜とその後の戦後処理の問題、それにヴォワリエからの結婚報告。七十歳を越え体力に衰えが見えてきていたヴァレリーにとっては、あまりにめまぐるしい日々だった。その間、ヴァレリーは体の不調に苦しみ続け、1945年5月11日の「詩人の社会的役割」と題した講演会に出席したのが、ヴァレリーが公の場で話をした最後となる。この講演会にはコクトー、クノー、ボンジュ、エリオットなども列席していたが、ヴァレリーは疲労のため、ほんのわずかしが講演することができなかった。ヴァレリーは恒常的な胃痛に苦しめられ、医者には外出を禁じられた。ヴァレリーはそれでも書斎に来客を迎えたり、20年以上の昔に取り掛かり始めていた詩『天使』に手を入れたりして過ごした。更に医者からは床に就くよう命じられたが「しかし机から離れるとは、自分自身から離れることだ。机無しでは私は存在しない⁴⁵。」とヴァレリーが抗議の声を上げ、医者はベッドの上に病院の机を置くよう指示した。そして、ヴァレリーは以後、ベッドを離れることがなかった。

ヴァレリーはジャンニーの献身的看護のもとで闘病する。遺された妻ジャンニーや友人知人、医師たちの回想、談話からジャルティによって再現されたヴァレリーの最期の日々は誠に哀切である。輸血、鍼治療、点滴、ド・ゴールの肝いりによりアメリカから取り寄せたペニシリン⁴⁶…。しかし何をもってもヴァレリーを回復させるには至らない。ヴァレリーの意識は明晰であり、疲労がそれほどひどくない時には会話を続け、冗談まで飛ばしたり、口の乾燥を防ぐためのスプレーを「システム・テスト」と名づけたりした。しかし、呼び鈴ではなく、ヴァレリーの苦しげなうめき声によってジャンニーが駆けつけなくてはならない場面が増えていく。

ジャンニーは尼僧看護婦を呼ぶ。ジャンニーはヴァレリーの自由を損なわない賢明さを持っていたが、夫の最期の時が近づいたことを悟り、カトリックの平安のうちに生を全うしてくれることを望んだのであった。ヴァレリーの部屋に入ったシスターは机に置かれたヴァレリーの著作の何巻かに目を通した。ヴァレリーは「すでにこれは、実に「虚しく」実に「空疎」であるとお思いになるにちが

⁴⁵ 「1945年の覚書」 フランス国立図書館所蔵。分類番号無し。

⁴⁶ *Op. cit.*, Michel Jarrety, p.1202.

いありません⁴⁷。」とヴァレリーは重々しい口調で述べた。

翌日、ヴァレリーは尼僧看護婦ヴァニエに心を許したのであろうか、「シスター様、私は人生の終わりに来ております。そう感じております。おしまいです。ですから私の前にあるのは壁です。空虚です。全てが闇です。」と語ったとヴァニエは後に述べている。ヴァニエはヴァレリーに普遍的な愛のメッセージであるキリストのメッセージを伝えたいとの思いを語る。ヴァニエはヴァレリーに問いかけた。「神が存在しないと心底確信することは可能でしょうか」と。「いいえ、心底確信はできません。私にはわかりません。」と答えたヴァレリーにヴァニエはこう言う。「論証されるまで神を見出すことはできませんが、イエス・キリストを知ろうとすることはできます。キリストは我々に愛というものを教えてくださるのです⁴⁸」と。翻意を願うヴァニエはヴァレリーに対し、「あなたの知的誠実さは、「神よ、あなたが存在するなら、それが本当なら、私に光を、私に力をお授け下さい」と呼びかけすることに背くことではないのです。」となおも述べた。ヴァレリーは意識が遠のく中であらうか、「そう、おそらく、おそらく」とつぶやき寝入ったという。

8日、呼吸困難に陥り、脈拍が速く不規則となったヴァレリーに対し、シスターは、神への呼びかけを勧める。「神を、我を哀れみたまえ」と。ヴァレリーは同意し、そのことにジャンーは感動した様子だったが、これをもってヴァレリーがカトリックに回帰したと見なすのは難しいであろう。翌9日にはデギネ神父が来訪し、ヴァレリーに神に関する問いかけを行ったが、ヴァレリーが信仰の言葉を口にすることはついになかった。とはいえ、医師、家族、友人が挙げて自分の回復を願ってくれていることへの感謝から隣人愛の重要性を痛感したのだろうか。ヴァレリーは、『カイエ』の終末近くに「『愛』という言葉は、キリスト以降ようやく、神の名と結びついた形で見出された⁴⁹。」と記すに至っている。

友人のモンドールは、その週の水曜日にヴァレリーを再訪した際、「病人の顔の途方も無い美しさ」に驚く。極度の青白さが皺を消し去ったように見え、ヴァレリーは上機嫌で微笑んでおり、どれほどヴァレリーの面立ちの晴朗なる高貴

⁴⁷ 1971年5月6日のクレール・ヴァニエによる未公開の談話から。 *Les Derniers jours de Paul Valéry* (私家版)。 *Op. cit.*, Michel Jarrety, Paul Valéry, p.1202.

⁴⁸ *Op. cit.*, Michel Jarrety, Paul Valéry, pp.1202-1203.

⁴⁹ 「1945年の覚書」、フランス国立図書館所蔵。および *Op. cit.*, Paul Valéry, *Cahiers*, CNRS, C.XXIX, p.911.

さに驚いたかモンドールはジャーニーに打ち明ける。それは死を前にした最後の輝きだったのだろうか。翌日木曜日の九時にヴァレリーは妻ジャーニーと駆けつけた子供たちと医師に見守られ、ついに身罷った。モノーはヴァレリーのデスマスクを取り、ロール・アルバン＝ギヨが死の床のヴァレリーを撮影した。

ヴァレリーの訃報は瞬く間に広がり、翌日ド・ゴールは朝のうちにヴィルジュスト街に弔電を打つようパレウスキに依頼した。午後ロジェ・マルタン・デュ＝ガールは、地下鉄で新聞を読み訃報に触れる乗客たちを目にした。彼らはヴァレリーを知りもしないし、読んだこともないのに、こう言い合っていたという。「ポール・ヴァレリーがね、死んだって！⁵⁰」

ド・ゴールはヴァレリーの国葬を望んだ。荘厳なる仕草によって、いまだ脆弱な国家の絆を確固としたものとしようとしたのだった。ド・ゴールはヴァレリーの国葬責任者として、歴史建造物責任者を務めたヴァントルを任命した。

サン・トノレ教会での葬送ミサの後、ヴァレリーの棺は日中教会に安置された後、夜になり松明を持ったフランス衛兵たちの人垣を縫い、ヴィクトル・ユゴー広場からトロカデロ宮殿まで運ばれた。三色旗の立つ広場の架台に安置された棺は松明で取り巻かれ、松明は一晩中輝き続けた。トロカデロ宮殿を背景しにしてエッフェル塔の足元から投光機が巨大なVの字を描き出していた。ヴァントルの見事な演出である。息子のフランソワの友人パウルは言った。「ごらんよ、何て綺麗なんだ。ピラネージのようだ。父君もさぞかしお喜びだろう⁵¹。」

弔辞を述べたコレージュ・ド・フランスの理事は「ここぞというときに六分儀を掴み、空模様を伺い、目印をつける」師匠のひとりとしてのヴァレリーにオマージュを捧げた⁵²。教育大臣が政府と国家を代表して弔辞を述べた。曰く「消滅しかねかった深淵からフランスが抜け出てきた」今この時に、「ヴァレリーにフランス見ずあらの姿を認めています。なぜなら、苦悩の最奥部において、あるいは勝利の陶醉の中で、あるいは力の荒々しい奪還の中で、ヴァレリーの良心に絶えず耳を傾け続け、絶えず知性の光に照らされ晴れやかになっていくだろうことを、かつて無いほどフランスは悟っているからです⁵³。」と。その言

⁵⁰ R.Martin du Gard, *Journal*, éd. Cl.Sicard, t. 3, Gallimard, 1993, p.753.

⁵¹ François Valéry, *L'Entre-trois-guerres de Paul Valéry*, Gallimard, 1993, p.74.

⁵² *Op. cit.*, Michel Jarrety, *Paul Valéry*, p.1210.

⁵³ フランス教育省の官報48号の補遺に掲載されている。ジャルティの引用による。*Ibid.*, p.1211.

葉は国葬を以てヴァレリーを遇したド・ゴールの思いを汲んだものでもあるだろう。

ヴァレリーを最後の日まで見舞い、毎日電話を欠かさなかったジッドは、あえてヴァレリーの葬儀には赴かなかった。ヴァレリーの身罷ったその日、ヴァレリーのアパルトマンからモーリアックと車に同乗し帰宅する際ジッドは「その精神しか知られておらず、その精神しか知るべきものはないと思われていたこの男は、善良さそのものだった。」と語ったという⁵⁴。

国葬の後、ヴァレリーの棺は家族に伴われ、故郷セートの墓地へと運ばれた。埋葬を終えるとジャンニエは息子のフランソワ、そしてヴァレリー研究者の元アルジェ大学教授ジャン・イチエと共に、ヴァレリーが思春期から青年期を過ごしたモンペリエを訪れ、縁の場所を経巡り、ヴァレリーの存在のようなもの見出し感銘を覚える⁵⁵。

浩瀚なヴァレリー評伝の最後を、ジャルティは「月曜日に、ジャン・イチエは二人をパリまで送って行った⁵⁶。」の一文で締めくくっているが、そこには、文献や談話を通しヴァレリーの人生を極限まで再現し、その死までを見届けた研究者としての自画像が重ね合わされているのかも知れない。

おわりに

以上に1942年から1945年の死去までのヴァレリーの人生を、ミシェル・ジャルティの詳細な評伝を手がかりとしつつ振り返った。期間としては数年に過ぎないが、公私両面に相わたるヴァレリーの日々の密度と強度には改めて驚かされる。この時期に書かれたヴァレリーの著作や『カイエ』の解釈にはあえて踏み込まなかったが、このようにつぶさに作家の年月を辿ってみると、作家の人生というもう一つの「作品」も独自の重みを持って訴えかけてくる。日常のさり気ない言葉や振る舞い、政治的な判断を要する場面での行動、そしてそれらの背後に透かし見られるヴァレリーが自らに課していたプリンシプル。そうしたものは必ずしも文学的な価値とは直接に結ばれてはいないかも知れないが、

⁵⁴ Claude Mauriac, *Le Temps immobile* 4, Grasset, 1977, p.368.

⁵⁵ *Op. cit.*, Michel Jarrety, *Paul Valéry*, p.1210.

⁵⁶ *Ibid.*, p.1211.

人間の真実の一端を伝えてくるものであるのは確かである。

ヴァレリーの人生は、この時期のフランスのあるいはヨーロッパの文化・政治的結節点ともなっていたのであり、本稿ではほんの一部の人名にしか触れることができなかつたが、夥しい人間たちとの交流の中で生まれたものである。ヴァレリーと交流を持った人物の多くは、歴史に何らかの足跡を残している。ためしにジャルティによるヴァレリーの評伝に表れる人名をネットで検索してみると良い。一見マイナーに思われるような人物であっても、驚くべきことにフランス語版ウィキペディアにヒットしない例はそう多くはないのである。ジャルティが丁寧に拾い上げたヴァレリーにまつわる人物それぞれの履歴、そして紡がれてきた人的文化的ネットワークを思う時、私たちは個人の評伝を越えた文化史的な広がりを目を開かれるだろう。

ヴァレリーの晩年の数年を浩瀚なる伝記によりつぶさに再体験した後、同時期に書かれたヴァレリーの著作や『カイエ』の狭義の文学的研究については、テキストそのものに還らざるを得ない。狭義の作品についての記述を欠いたヴァレリーの晩年の記述を行った責めを塞がなくてはならないが、それは今後に期したい。